混沌の夜への眼差し

――「親戚モリヌー少佐」のディスクール――

（ホーソーン短篇論2）

三宅卓雄

「親戚モリヌー少佐」（"My Kinsman, Major Molineux"）は前稿[1]でも触れた通りホーソーンがその作家としての経歴の最初、二五歳の頃に書いてしまった傑作、いやわずかに『緋文字』を除けば、完成度という点からいって短篇の中でという留保をつける必要もない全作品の中での最高傑作である。従ってこの作品を論じる論文の数量は厖大というに近く、歴史主義的解釈派と深層心理学的解釈派[2]の間にわって入って何か新しいことをこの作品に関していうことは至難のわざと思われる。自分もこの傑作について何かを語りたいと思いながら多くの研究論文に目を通していると暗然たる心持にならざるをえない。しかし改めてもう一度作品自体に立戻ってみると、この作品は多すぎる解釈の故に色あせるということは全くなく、然るべき解釈はすべて呑みこみ、はみ出すべき解釈ははみ出させ振落して目の前に輝いている。そして、これが何故そのような豊かな自足性をもっているのかということ自体の中に自分のいうべき事柄が見えてくるのである。

この短篇はホーソーンの作品の中で最も完璧な、豊かに自足的な作品である。我々がこれを読んで先ず感ずるのは、作者の叙述のコントロールの完全さである。具体的な事物の描写と主人公の心理描写が見事に融合され、更にそれが象徴性の次元に高められている。そういう意味でこれは一篇の詩に近い。

もう一つこの作品の与える重要な印象は作品世界の空間性である。この作品はまたホーソーンの全作品の中で最も確かな空間性を感じさせるものである。勿論それは、ある町の中を主人公がある人物を探して歩くというこの作品のテーマに関わっているが、理由はそれだけではない。空間性とは視覚に関わることである。そして小説作品における視覚とは、作品に内在する視線のあり方、即ち作者の叙述の方向性のことである。先程この作品を一篇の詩に近いといったが、詩と小説との違いはこの叙述の方向性の有無に関わるといえよう。即ち、作者が何をどのような視点からどのような角度で読者に見させているか、というある種の構造が作品の中に内在しているのが小説である。[3] そしてこの「親戚モリヌー少佐」という作品はそこのところのコントロールが完璧であり、その豊かな自足性もそこに由来していると思われるのである。

一篇の散文作品が右のような特質を読者に顕著に印象づけるとすれば、その作品の意味を探ろうとする場合、まず何よりもそのような特質そのものの中にそれを求めてゆくべきであろう。一般的にいっても、作品の意味とはその叙述のありよう（以下これをディスクールと呼ぶ場合もある）[4] を離れてはないものなのだから。これ迄この作品を論じたものの中に欠けていたのはそういう面からのアプローチである。従って以下本稿では、この作品におけるいわばディスクールの構造といったものを探ることを通して作品自体の提示するところの総体を明らかにしてみようと思う。

ディスクールの構造などと大袈裟なことをいわないで「視点」の問題といってもいいのだが、ただ後者の用語

ではジェイムズ以来の現代小説におけるその技法の厳密性が連想され易いので避けたいのである。ホーソーンのそれは当然もっと自由な融通性をもっている。だがその融通性のコントロールということが実に重要なのであって、それはディスクールの構造というような概念を導入してはじめてよく吟味出来ることなのだ。

作品の前置きの部分（歴史的背景の説明の部分）は一応別として、視点あるいは叙述の方向のありかたは、物語の進行に従って微妙に三様に推移する。

第一は、主人公の少年ロビンがニューイングランドの田舎からある都会（ボストン）に夜到着して、親戚モリヌー少佐の家を尋ねて町の中を彷徨し、何度も人々から不可解な拒絶と嘲笑に会った挙句、ある奇怪な人物から教えられてかの少佐の到来をある教会の前で待つところまで、作品の前半分をカヴァーする。この一連の部分の叙述は、形の上では客観的ないわゆる全知の位置からなされているのだが、しかしそれは微妙な角度を保っている。この部分の冒頭で作者は主人公の外観を手際よく提示して、彼についての必要なだけのイメージを読者にきちっと与えておく。そしてそれはホーソーンの「視点」への配慮を如実に示す如く、一登場人物の眼を通して提示されるのだ。ロビンが渡し場に降り立って船賃を払おうとポケットの中を探っている間に、船頭が「カンテラを差上げ、昇ったばかりの月の光の助けもかりて、そのよそ者の姿を仔細に眺め」（二六頁）[5]ることによってである。職業柄客の風体を見てとることには長けているであろう船頭が、まして常ならぬそんな夜ふけにそのたった一人のために船を出させられた当の客の姿を念入りに観察したとあれば、一篇の物語のためにはそれだけで十分であってこの後この主人公の外観について作者が付加えることは一つもない。船頭が見てとるところのもの（即ち読者が提示されるところのもの）は、①十八歳位の田舎出の若者であること、②貧しい育ちであること、

③しかし家族の愛情に包まれているらしいこと、④若者自身のたくましさ、素朴さの性質、などといった点である。

作中人物の眼を通してこれだけのことを提示したあと作者はあっさりとその窮屈な視点を去る。そして既に述べたように微妙な角度をもった全知の視点をとって、主人公の視点に即した客観的叙述というディスクールで物語を進めてゆく。ロビンはこれから町の中をモリヌーの家を探して歩きまわる。そこで読者に提示される事柄はすべてこの主人公がその過程で見、聞き、経験する事柄の範囲に限られる。そうでありながら叙述は彼の意識の範囲に縛られず、それを離れて客観的な内容も書き加えられてゆく。例えばロビンがある宿屋へ入ってゆくとそこの亭主が出てくる。そしてその亭主は「フランス新教徒の二代目の男で、母国の礼儀作法をまだ受継いでいるようであった」(三〇頁)と記される。こういう事実は勿論「よそ者」の主人公の視点からは知り得ようのないことで全知の位置からのコメントである。が、この亭主にしても主人公がもし彼を見ないれば決して言及されることはないのである。

主人公の意識にあくまで即しながらそこに縛られずに客観的叙述も加えてゆくというこのようなディスクールは、では作品のどのような主題へつながるであろうか。それは主人公の主観と彼をとりまく客観的現実との間の齟齬という問題である。主人公はモリヌー少佐に会うことを唯一の目的として初めての夜の都会を歩き回る。その目的とそしてそれを実現出来るという自信があるだけで、彼には当夜のその都会の具体的現実が何一つわかっていない。彼の足は夜の町を闊歩し彼の眼差しは確かに夜の空間を拓いてゆくが、見えるものの背後の意味が全くわからない。彼は五度人々に少佐の家のありかを尋ねて五度とも不可解な嘲笑と拒絶にあう。だが重要なのは、読者にはその意味が主人公にとってほど隠されてはいないということだ。そこがホーソーンのこの一見カフカ的

な作品のカフカの小説とは違う点であって、主人公にとっては不可解な外的情況には明らかな社会的歴史的意味が存在している。この作品の見事なところは、主人公にとって不可解な外界のディテールの一つ一つ（嘲笑と拒絶の他に例えば怪異の二重面相の男、町の男達の合言葉等）がすべて実は当夜の歴史的事件に具体的につながっているという作品の内的外的空間の重層性にある。そのことを読者に伝えるのがコントロールされたディスクールのあり方そのものに他ならない。その一つの重要な技法は主人公に向けられたアイロニーである。主人公に関する叙述の中に「聡い若者」（shrewd youth）という形容が頻出する。（cunning という言葉もいれると前後七回ほど用いられている。）しかも大体それは彼が不可解な外界につき当る度に繰返されるのだ。そしてそれは作者が純粋に客観的に述べているのではなく、微妙に半ば主人公の意識に即して述べているのである。主人公は自分を「頭がいい若者」と自認し、自信をもって夜の都会にふみ入ったのである。このアイロニーが主人公の主観と外界とのギャップを読者に効果的に印象づける。だが、主人公の主観が外界に拒絶されるさまを描くことはどのような類のディスクールによってであれむしろ容易であろう。この作品の前半でホーソーンの筆がとりわけ見事なのはそうではない場面、即ち主人公の主観と外界とがあわや相交わらんとする場面――ロビンが「真赤なペチコート」の女に誘惑されそうになる場面である。ここでもロビンの主観はあくまでモリヌーの居所を尋ねるという一事にあり、一方誘惑的な女は彼にとってまさしく不可解な都会の一部である。その対比は変らない。だがここでは後者は前者を拒絶するのではなくて逆に誘う。ここで主人公の若い性が、彼の主観・名分を微妙に裏切ってゆくさまをその主観に即して描くホーソーンの叙述は見事という他ない。ここに論じている彼のディスクールの見本としてその場面全体を引用しよう。

……彼が近づいてゆくとそれにつれてドアが閉ってゆくのだったが、少しだけは開いたままで、中にいる女が自分の姿は見せないままその見知らぬ相手をのぞき見ているのだった。ロビンに見えたのは、ただ真赤なペチコートの端と、月光が何か光るものの上に落ちる時のように時々チラチラ光る眼だけだった。

「美しい御婦人」、とこう呼びかけたって少しもやましいことはない訳だ、だってその通りにしか見えないんだもの、とこの聡い若者は考えた。「美しい御婦人、どうか教えて頂けませんか、どこへ行ったらぼくの親戚のモリヌー少佐の家が見つかるのでしょう。」

ロビンの声には哀れっぽく人の心をうつものがあったし、女はこのハンサムな田舎の若者を避ける必要もないとみて、ドアをさっと開いて月明りの外に出てきた。白い首すじ、ふっくらした腕、細腰の小柄で優美な女で、その腰のところから真赤なペチコートが輪骨で大きくふわりと拡がり、まるで気球の中に立っているような姿だった。卵形の顔はきれいで、小さな帽子をのせた髪は黒々して、その眼にはいたずらっぽい大胆さがきらめいていてロビンの眼差しを圧到するのだった。

「モリヌー少佐殿はここに住んでおいでよ」とこの美しい女は云った。その声はその夜ロビンが聞いた声の中では最も甘美であったが、しかしその甘美な声が神かけて本当のことを云っているのかどうかロビンは疑わざるをえなかった。彼はさびれた通りをあちこち見渡して、それから自分達が立っている前の家をよく見た。それは二階建の小さな暗い建物で、二階の方が一階よりも出っ張っており、正面の部分は一文商品を売る店のようなしつらえである。それからロビンは抜目なく云った。「それじゃ僕は本当に運がよかったわけだ。それに僕のおじさんの少佐も運がいい人だ、あなたのように美しい家政婦さんにいてもらうなんて。だけどすみませんが少佐に戸口のところまでちょっと出てもらって下さい。田舎の友人から少佐への伝言を伝えたいのです。それがすんだら僕は宿へ帰ります。」

「いいえ、いけませんわ。少佐殿はもうさっきから寝んでいらっしゃるの。」と真赤なペチコートの女は云った。「それにあの方は今夜はいちばん強いお酒を召上っているから、お起ししたって無駄でしょう。でもあの方はおやさしい方だ

から、私が御親戚のあなたを戸口から追い帰すなんてことをしたら大変ですわ。あなたって旦那さまに生き写しね。その雨よけ帽子は、きっとあの方がむかしかぶってらしたのね。それにあなたの皮のズボンとそっくりのを今も持ってらっしゃるわ。さあ、お入りなさいな、旦那様に代って心から歓迎しますわ。」

そう云って美しい愛想のいい女は我らの主人公の手をとった。女の手ざわりは軽く、引く力はやさしかった。なのにその細腰の赤いベチコートの女の力の方が、がっちりした田舎育ちの若者の力より強かったのだ。しかも若者は女の眼の中に、口で云っている言葉とは違うものを読みとっていたというのに。（二二一四頁）[6]（傍点筆者）

長い引用になったが、この全体が客観的描写のように見えながら実は主人公の視点に即した叙述となっている。ただ一ヶ所ふとそれから離れるだけである。（女がロビンを見て外に出てくるところ。）これが物語前半のディスクールの見本である。

さて、先程の主人公に対するアイロニーという問題に話をつなげると、右の場面におけるロビンに対する“shrewd”“cunningly”という形容は、ホーソーンの微妙な描写から読みとれるように、ここでは単にアイロニーにすぎないものではなく、主人公はその通り最初から相手の女の正体に関して「聡く」も疑念をいだき、「抜目なく」対応しようとしている。結局彼が女に誘われそうになるのは愚鈍であるからではなくて、その若い性が知恵を裏切ってしまうということなのだ。先にロビンは自分を頭のいい若者と自認していると述べたが、その点に関して彼がいう言葉は「みんなが僕のことを頭のいい若者といっている」（四〇頁）（“I have the name of being a shrewd youth.”）というのであって、これは少くとも田舎では彼がそういう評価をうけているという事実を語る。[7] ここで、ホーソーンのこの点に関する執拗な言及についてまとめてみると、ここには三つの相における効果が認められる。第一には既に述べたように、客観的なアイロニーとして主人公の主観と外界の現実との間の

ギャップを読者に印象づける。第二に、それは主人公の主観でもあって彼が全く未知の夜の都会にふみこんでゆく心理的支えとなっている。第三に、実はそれは全くのアイロニーでも本人のひとりよがりでもなくて、或程度の真実であるということ。従って、その彼が当夜己れを取まく外界の現実の意味を全く理解しえないのは、都会の政治的社会的現実というものが田舎の素朴な知性による理解をはるかに越えるものであるという作品の一つのテーマが浮び上ってくる。繰返すが、右のような三つの意味・効果が可能であるのは、ひとえにホーソーンのディスクール自体、客観と主人公の主観の間にあって微妙な角度を維持するそれ、によっているのである。

さて、物語の次の部分になるとそのディスクールの角度に変化が生じて主人公の意識への傾きがぐっと深くなる。ここではもうほとんど厳密に主人公の視点をとるといってよい。ここで語られる内容は、町の中を歩き回って遂にモリヌーの居所を探しあぐねたロビンが、例の怪人二重面相の指示によって大通りのある教会の前でモリヌーの到来を待ち、やがて狂熱的な群衆による引き回しの行列のただ中に恐るべき少佐の姿を直視する、ということである。この一連の場面でホーソーンの叙述が主人公の主観の中に沈みこんでゆくのには必然性がある。まず、物語の前半では主人公の主観を強硬にはね返していた外的状況が、後半では（主人公が無人の境に静止しているために）後退してゆく。己れが頭をぶつけていた壁を除去された主観は無限定に延び拡がり、静止した外界を意識で覆う。更にロビンは今や疲労と空腹の極にあり（彼は旅に出て既に五日目であり、この日だけでも昼食もとらずに既に三〇マイル以上歩いている）、探索の不首尾に絶望感と孤独感と睡気におちこむ。そうなると外界への明確な認識力が鈍って意識が現実と幻想の間を揺曳し始めるのも当然である。おまけに（いやホーソーンにあってはこれは決しておまけになどというべきではないのだが）、あたりはおあつらえ向きに月光の下にある。[8]

そういう状況にある主人公を叙するにあたってホーソーンはこれ迄の、主観と客観の間に斜めの角度を保った視点から、主人公の意識の中に垂直に透入してゆく。[9] ここからクライマックスに至るまでの叙述で、先の引用文の中に一ヶ所あったような主人公の視点から完全に離れた部分はほとんど一行もみられないといっていい。そして勿論重要なことは、このことに注目せずしてはこの作品の意味を正当に十分にうけとめることは出来ないのである。ロビンの一夜の体験の意味は全く彼の意識の内側を離れてはありえず、それはここのディスクールのありようを離れてはありえないということなのだ。

物語の前半におけるポイントは既に述べたように、「聡い」主人公の主観と町の現実との間のギャップ、前者にとっての後者の不可解性ということにあった。それは後半のこの場面になっても少しも変らない。変らないどころか、前半では順に一つずつ立現れた謎が、今や打って一丸となって圧倒的なエネルギーを発散させながら主人公の前に、しかも前述したような心身共に極限的な状況にある主人公の面前に寄せ戻ってくるのだ。前半で主人公を拒絶した町の人物達（赤いペチコートの女も含めて）がすべてこの「熱に浮された脳髄をつき破って出てきた夢が深夜の街路を行進している」（四二頁）といったような、文字通り悪夢的な行列の中に再登場し、以前の彼等の個々の嘲笑がけたたましさの度を加えて今一度響きわたる。その真っただ中に坐らされた頼るべき人モリヌーの恐ろしい屈辱の姿の中に、若いロビンは一体何を見たのか？　一つ見なかったことだけは確かだ。それは事件の客観的意味、即ちイギリス本国王党派のその都会の権力者モリヌーが独立派の徒党によってその権力の座からひきずり下されるという政治的意味である。これを主人公は最後までわかっていない。彼が混沌の夜の底の燃えさかる松明の明りの中に、酩酊状態の眼差しで見てとったものは唯一つ、自分が世に立つにあたって当面唯一人の頼りと求めていた人物が倒されている事実であった。その事実は疑いようのないものとして現前してい

るが、その背景は依然として不可解である。ロビンの主観と客観的状況との間のギャップは依然として埋められていないのだが、ロビンの極限状況の精神はもうそのギャップを見つめる緊張に耐ええない。究極的な不可解を残したまま彼はそこで溝をとび越え、向う側、己れに対しての謎の提出者の側に合体する——或はさせられる。それが群衆の哄笑に参加する彼の大哄笑の意味である。だからそれはイーサン・ブランド（同名の短篇の主人公）の笑いのように絶望の笑いであると同時に、それとは違って絶望の危機からの解放の笑いでもあるのだ。幼ない親戚としてその保護を頼るべき権威者モリヌーの悲惨な姿にロビンは無限の「憐憫と恐怖」を感ずると同時に、群衆と共に彼を嘲笑したい衝動にかられる。畏怖と冒瀆、このアンビヴァレントな二つの感情がせめぎあいながら彼の爆発的な笑いの中に解消されてゆくことを、我々はここまでに至りここに達するホーソーンのディスクールそのものを通して感得するのである。

さて次にこの作品におけるディスクールの第三番目の変移について検討することになる。この部分は作品の結びの部分で極めて短い。しかし実はそこにこの作品全体を見渡す重要な観点が隠されていると筆者はみるのであって、それを明らかにすることが本稿の眼目になる筈である。

これまでの二種のディスクールは程度の違いはあれ（無論これまで論じてきたようにその程度の違いが重要であったのだが）、両方とも主人公の主観に即するものであった。それに対して最後のこの部分ではそこから離れる。このようにいうと、人は「何も難かしいことをいわなくても、作者は最後に客観的な視点をとって物語を閉じているのさ」と簡単に合点してしまうかも知れない。だがそのように簡単に済ませてはいけないのだ。我々はこの作品の最後の部分をある想像力を働かせながら読みきる必要がある。この作品の豊かな自足性はそこのとこ

ろにかかっているといってもいい過ぎではないのだ。

叙述が主人公の主観を去るという点をホーソーンは驚くべく効果的に読者に印象づける。主人公も加わっての群衆の大哄笑が響きわたった直後、ホーソーンはこんな風に書く。

> 笑いどよめきが一団となって空に響きわたると、雲の精達が銀色の島々から下をのぞき、月中の人（the Man in the Moon）がはるか下のさわぎを聞いて云った。「おほう、老いぼれ地球のやつが今夜は浮かれているわい。」（四四頁）

ここまでのところは専ら主人公の主観に関わる叙述で通してきている（またそうでなければならなかった）のであるから、この件りは唐突で異様でさえある。これをホーソーンのファンシーとして片づけてしまってはいけない。それがファンシーであるにしても、ここに必要なそれであるのだ。ある評家はこの部分に正当に注目して多くを論じ[10]、その議論は有益ではあるが、ただ彼が見落している重要なことは、これによる突然の視点の転換の効果とその意味である。ここまで主人公の意識についてきた読者の意識はここへきて突然異化され主人公からひき離される。そしてそれは当然ひき離されねばならないのだ。何故なら哄笑を放ったあと主人公は呆然自失の状態に陥るのであり、彼の主観についたディスクールはそこで空白たらざるをえないからだ。だから右の個所の直後の叙述、即ち行列が再び動き出し視界の外へと去ってゆくさまを叙する部分はもう主人公の眼差しについたディスクールではないと考えたい。では誰の？　全知の作者による客観的な描写なのか。そう考えてもいいが、我々はここにロビンのとは異る作中第二の眼差しの存在（或はそれは潜在といった方がいいかもしれぬ）を見出すべきなのだ。その眼差しは去ってゆく群衆と呆然自失のロビンの両方を見ている。いう迄もなく件の紳士のそれである。

作者によって「紳士」（the gentleman）とだけ呼ばれているその人物は一体何者であろうか。彼はロビンが教会の前でモリヌーの到来を待っている時にそこを通りかかり、ロビンに呼びとめられ、親切に彼の話を聞き、モリヌーに会いたいのならばそこで待つのがよいと教え、自分も一緒にそこにとどまる。そして行列が来てモリヌーとロビンの対面が恐ろしい形で実現し、後者が群衆の哄笑にまきこまれたあと呆然としていると彼はその肩にふれて我に返らせる。そしてロビンがもう町を去りたいから渡し場への道を教えてくれと頼むと、そんなに急いで去る必要はない、君は聡い若者だからモリヌーの助力がなくても町で自立してやってゆけるだろう、と助言する。

ロビンに対する態度、殊に最後の助言からして彼をロビンの（モリヌー少佐に代る）精神的保護者・導き手としてみる見方が通例であるが筆者もそのこと自体には異存はない。ただこの人物は作品のトータルな意味に関わるそれ以上に重要な存在であることを主張したいのだ。

先にこの一連の場面を通じて、主人公ロビンの意識を離れるディスクールはほとんど一ケ所もないといったが、実はそれといえる所が一ケ所あって、そこにはそれだけの意味があるのだ。それはこの「紳士」の登場の場面である。先に述べたようにここにあって主人公の意識は現実と幻想の間を揺曳して定まらない。そこへ件の人物が登場してくるのだが、そこのところのディスクールがまた微妙を極めるので、原文を引用したい。

> He aroused himself, and endeavored to fix his attention steadily upon the large edifice which he had surveyed before. But still his mind kept vibrating between fancy and reality; ... For a single moment, when he deemed himself awake, he could have sworn that a visage—one which he seemed to remember, yet could not absolutely name as his kinsman's—was looking towards him from the Gothic window. A deeper sleep wrestled with and

nearly overcame him, but fled at the sound of footsteps along the opposite pavement. Robin rubbed his eyes, discerned a man passing at the foot of the balcony, and addressed him in a loud, peevish, and lamentable cry.

"Hallo, friend! must I wait here all night for my kinsman, Major Molineux?"

The sleeping echoes awoke, and answered the voice; and the passenger, *barely able to discern a figure* sitting in the oblique shade of the steeple, traversed the street *to obtain a nearer view.* He was himself a gentleman in his prime, of open, intelligent, cheerful, and altogether prepossessing countenance. *Perceiving a country youth, apparently homeless and without friends,* he accosted him in a tone of real kindness, which had become strange to Robin's ears.（三八—三九頁、イタリックは筆者）

右のディスクールに関していうべきことは二つある。一つは、この定めなき主人公の意識の中で親戚モリヌーのイメージとこの紳士の姿が一瞬重なる、或は重なりながら交代するということである。"He was *himself* a gentleman in his prime," というのは、現われたこの人物自身もその時主人公の意識の中にあった親戚モリヌー少佐と同じような立派な紳士であった、という意味に他なるまい。これによってこの人物はロビンにとって象徴的な重要性をおびるといえよう。

もう一つのポイントは、イタリックの部分に示されるように、ここまでのところもこのあとのところも全体を主人公の意識が領している一連の場面にあって、ここでこのように彼以外の視線がそれとなく侵入してきている点である。彼以外のどころではない。彼を視る視線である。以下に述べるようにこの意味は極めて重要である。

この人物に関して最も重要なことは、彼はこの作品世界のすべてを知る者として最後に登場することである。右のように主人公ロビンを視つつ登場してきた直後、彼はロビンの身の上話を聞く。ロビンは生い立ち、家族、

モリヌー少佐との関係、当夜この町にやって来た目的、町へ着いてからそれ迄の経緯などを彼に物語る。要するに彼はロビンに関して我々読者が知ることのすべてを知っていることになる。一方彼はその町の人間として、主人公にとっての不可解、即ち町の当夜の現実のすべてを知っている。ロビンがモリヌー少佐のことを知っているかと問うのに対する答えは "The Major Molineux! The name is not altogether strange to me." (三九頁) であり、またロビンにとっての最大の謎・二重面相の男のことを知っているかという問いに対する答えは "Not intimately." (四〇頁) である。両方共知っているのだ。とにかく彼は当夜二重面相の男がリーダーとなって打ち倒された権力者モリヌーを引き回す行列がその場所を通ることをよく承知しており、無垢な若者ロビンにそれを見させようとし、自分はその出合いを見守ろうというのだ。("... as I have a singular curiosity to witness your meeting, I will sit down here ...") (四〇頁)

だから、その時点以後、行列がやって来てモリヌーとロビンが対面し、ロビンが高笑を発するという一連の場面——すべてロビンの眼差しに関わるディスクールによって提示される場面の全体が、実はこの紳士の潜在的な眼差し(登場の当初ロビンのディスクールの中に侵入してその時だけ顕在化したそれ)によって見守られていたことになるのだ。彼は群衆とロビン自身がヒステリックな高笑を発する時、唯一人笑わないで場面を見守っている人物である。このことに十分注意を払うならばこの人物の重要さは明らかだろう。彼は高笑のあと放心状態に陥ったロビンを見守り、やがて声をかけて我に返らせる。それが最後の場面であるが全体を引用してみよう。

「さあ、ロビン君、君は夢をみているのかね?」と件の紳士が若者の肩に手をかけて問うた。はっと気がついたロビンは、先刻群衆の流れがそばをうねって過ぎていく時に本能的にしがみついていた石柱から腕をはなした。彼のほほはやや青ざめ、眼は以前ほどの生気を欠いていた。

「すみませんが渡し場までの道を教えて頂けませんか」と彼はちょっと間をおいてから云った。
「じゃあ君はどこか別のところを訪ねることにしたってわけなのかね。」と相手はほほえみながら云った。
「ええ、まあ」とややぶっきら棒にロビンは答えた。「あなたや他の友人達のおかげで僕もやっと親戚に会えたんですが、あの人はもう二度と僕の顔は見たくないでしょうからね。僕はもう町での生活がいやになりました。渡し場への道を教えてくれませんか。」
「いやロビン君、少なくとも今夜はやめなさい。」と紳士は云った。「あと数日して君がまだそう望むなら私が出発させてあげよう。また、もし君が私達とこの町にいたいというのなら、君は頭のいい若者だから、多分親戚のモリヌー少佐の助けなしでも立派にやってゆけるだろうよ。」（四五頁）

この結尾部のディスクールについていえることは、それ以前までの主人公の意識から離れているという一事である。これはいわゆる客観的描写といっていい。ただここでは既にみてきたような紳士の役割からして彼の眼差しと言葉のもつ比重が大きい。

さて、作品全体のディスクールの検討を了えてそこから作品の意味を確認する順序となるのであるが、その前にもう少しだけこの紳士なる人物について考えておきたい。作品の意味は、それを視ているこの男を離れるわけにはゆかないのだ。

筆者はここで、作者がそうとは書いていない一つの事柄に想像を伸ばしたいのだ。それは、ロビンの問いに対する答え方がかえって感じさせるように、この紳士は実は倒された権力者モリヌーの親しい友人であったのではないかということだ。[11] この人物にはモリヌーと同じ党派の支配階級に属することを思わせる貴族的な人品が備わっている。（He was himself a gentleman in his prime, of open, intelligent, cheerful, and altogether prepossessing

countenance.）とにかく彼はその夜モリヌーを迫害する側の住民達とはたった一人画然と異ることだけは確かなのだ。とすれば事情を知った彼がモリヌーの幼い親戚にそのように親切な態度で接することも全く合点がゆくのである。彼は少くとも今夜は悲運の友モリヌーに代ってロビンを見守っていてやらねばならぬ。そしてこの若者がこれからモリヌーの助けなしでやってゆく覚悟をつけてやらねばならぬ。そして彼が二重面相の男に関してロビンにいう言葉――「人というものは顔を二つもてるのと同じで声だっていくつももてるのではないかね。」（四一頁）――は、テーマに関連して若者に大人の世界（都会）の複雑さを教える言葉であるが、右のコンテクストにおいてみると、その言葉は単に大人が若者に与えるモラルであるに止まらず、その紳士自身にとって極めて切実なひびきをもったものとなるのだ。何故なら、その友が悲運の真っただ中にあるのを彼はただ見ているだけしかないのであり、民衆から自分がモリヌーの友であることを隠さねばならない（おそらくそう推定してよかろう）という意味において彼は友を裏切っているのだ。即ち彼自身が「二つの顔」をもった人間なのだ。[12]

このように読むのは深読みのしすぎであろうか？　しかし別に外側から何一つ読み込んでいるわけではないのだ。筆者はこの作品におけるディスクールを綿密に辿ってきた。ディスクールを綿密に辿ってゆくと作品の内的外的空間性というものがはっきり浮び上ってくる。そしてそれが更に作品の内部（奥ゆき）への想像力を喚起するのだ。それはこの作品の自足性自体が要請する読み方であり、またその結果であって、恣意的に外から何かを読み込むこととは違うのだ。

作品の意味についての結論を急ごう。この作品世界は二重の眼差しによってなっている。一つはロビンのそれで、前半から後半、客観から主観へ深まるディスクールが、その眼差しが外界の事件の意味をとらえ得ないまま彼の内面にひき起される激変を描き出す。もう一つは件の一紳士のそれで、これは後半の途中から最後まで潜在

的に作品世界の全体を照射し、従ってこの眼差しこそがこの作品の豊かな自足性を支え保証しているのである。

ロビンの内的体験の意味は何であろうか。それは多くの批評家の指摘通り、若者が大人の世界に入ってゆく過程で経なければならないイニシエイションであろう。それが極めて圧縮された主観性・心理的過程のうちに象徴的に描き出されているのだ。これを既にみたその場面のディスクールに即して考えてみるならば、ロビンのイニシエイションに二つの特性をみることが出来る。第一に、彼は究極的な不可解を残したまま向う側、群衆の側へとび越える、或はひき込まれる。イニシエイションとはそういうものであろう。入るべき世界への完全な理解を経ての円満な参入ではなくて、それは、不可解なるものへのある恐怖のうちの一跳びといった性質のものであろう。そしてもう一つ、それはロビンの哄笑のうちにみられるように、一種の冒瀆性を含むものであるだろう。これ迄尊いもの・頼るべきものとしてきた対象に向って、これまたある恐怖のうちに冒瀆を浴せること――それもイニシエイションの一つの特質であるだろう。だからそこには当然無垢の喪失・堕罪といった要素がからまってくる。客観的にはマスター・オヴ・セレモニーとしての変装にすぎない怪異の二重面相を、ロビンが主観的に専ら悪魔的なものと受取り、自分がその支配力に屈するのではないかという不安な予感を感ずるのも、そういう意味で重要なのだ。ロビンのイニシエイションは堕罪の契機を含む。ロビンがこのように暴力的に己れをひき込んだ世界を反射的に忌避して、すぐにその町を去りたいと願うのには心理的リアリティーがあるが、同じ心理的リアリティーがやがて今度は、そのように己れをひき込んでくれた世界に彼をひきつけることになるであろう。

「数日したら」彼がその町を去りたくなくなることまで件の紳士は見通しているのだ。

「人というものは二つの顔をもつものだよ」という言葉を与えてロビンを見守っている紳士の眼差しは無論右のようなロビンの内的経験の意味をすべて見ている。我々が彼の眼差しを通して尋ねるべきは、ロビンが見得な

かった事件の政治的背景の意味である。作品のディスクール自体の要請するこの観点から考えるならば、批評家の議論の分れるこの問題に対する答えは自ずから明らかだ。この人物がモリヌー少佐の友人であったのではないか、という想像はこの際控えるにしても、彼がモリヌーを打ち倒すことに狂喜している群衆からははっきりと異る視線をもってこのクーデター騒ぎを見ていることは確かだ。ロビンが群衆の哄笑に参加した直後行列が再び動き出し去ってゆくさまの描写の中に次のようにある。

> 彼等は進んで行った。それは、死んでしまっても早力はもたないがその苦悩の表情においてまだ威厳を保っている君主のまわりに、嘲けり群がる悪魔の群のようであった。彼等は進んで行った。偽りの豪奢を装い、無意味な歓声をはり上げ、気狂いじみた陽気さで、一人の老人の心を踏みにじりながら。（四四―五頁）

前にも述べたようにこの部分の描写を作者の客観的な叙述とみても、件の紳士の眼差しのとらえているものとみてもどちらでもいい。（何故ならこの作品における件の紳士の眼差しとは、その性質上作者自身のそれと極めて近いものであるから。）だがどちらにしてもこういう描写が示すものは、モリヌーに対する叛徒の所業を肯定的に提示してはいないということだ。ある批評家達がイギリスの支配を脱するアメリカの独立ということに関してのホーソーンの一般的な信念、または他の短篇に表わされた思想を援用して、この作品を古い政治的権威に対する民衆の反逆を肯定的に描いたものとしてみるのは正しくない。[13] この自己完結的な作品が示すところはそうではない。ここで再び主人公ロビンと外的事件の両方を見ている眼差しというものを想起してみると、後者・政治的事件の意味は前者・主人公の内的体験の意味と相関連したものとして浮び上ってくる。即ち、この政治的混乱は、アメリカという国が植民地から独立国に脱皮するために経なければならないイニシエイションだということであ

る。若者が内的激動のさ中に冒瀆という悪を行ったように、独立を求める民衆もまた混乱のさ中に一人の人間の「心を踏みにじる」という悪を行っているのだ。このように一人の若者と歴史が犯す悪を見つめる眼差し（ここでは早作中の一人物のというより作者の、という方がいいだろう）の中には断罪の色あいはない。それらは人生と歴史の発展の危機的過程にほとんど必然的に内包される悪だからである。しかしそれにも拘らずそれらを悪としてみる認識のリアリズムを、我々はこの混沌の夜の二重の世界にさし向けられた眼差しの中に読みとるべきなのである。

（一九七四年十月）

（付記）

本稿を書き上げたあと同僚の蜂谷昭雄氏とこの作品について雑談していた時に一つ面白い示唆を与えられた。それはこの作品が三人称の主人公を有しながら、“*My* Kinsman,...”というタイトルをもっていることである。これは作中主人公が繰返す言葉そのままを採ったものであるが、考えてみればちょっと妙ではあるまいか。このことは三人称の物語でありながら一人称的主観にそったディスクールによって作品が成っているという筆者の論点にうまくつながっているように思われる。

〔注〕

① 「固き世に投入れられた優しさ――ホーソーン短篇論(1)「優しき少年」――」（『英文学評論』第三二集、昭和四九年三月）

② これ迄のこの作品の解釈は大体この二つに分類される。それについては John C. Stubbs, *The Pursuit of Form: A Study of Hawthorne and the Romance*, (Univ. of Illinois Press, 1970) 中の六七頁注参照。尚、本稿は従来の論考とは全く異るアプローチをとるので、この作品に関する過去の論考の概観は省略する。

③ 尤も、T・S・エリオットの詩のあるものなどはその種の「構造」を内在させていると云える。

④ ロラン・バルトが次のように云っている意味でこの語を用いる。

「世界が存在し、作家が語る、これが文学である。批評の対象はこれとはたいそう異っている。それは世界ではない。それは一つの説述(ディスクール)である。（中略）批評は一つの説述についての説述である。」（ロラン・バルト『エッセ・クリティック』篠田浩一郎訳、晶文社、三五一頁）また、同じくバルトが「物語の構造分析序説」（『パイディア』九号）の中で、もう少し限定的に "narration" という語と関連させて用いているその語の用法が筆者の意により近い。

⑤ 以下引用は左記のテクストを用いる。

H. H. Waggoner ed., *Hawthorne: Selected Tales and Sketches* (Rinehart, 3 rd ed.)

⑥ *Ibid.*, pp. 32-4. ディスクールの質を示すという引用の性質上、左に原文を掲げる。

"Pretty mistress," for *I may call her so with a good conscience, thought the shrewd youth, since I know nothing to the contrary,*—"my sweet pretty mistress, will you be kind enough to tell me whereabouts I must seek the dwelling of my kinsman, Major Molineux?"

Robin's voice was plaintive and winning, and the female, seeing nothing to be shunned in the handsome country youth, thrust open the door, and came forth into the moonlight. She was a dainty little figure, with a white neck, round arms, and a slender waist, at the extremity of which her scarlet petticoat jutted out over a hoop, as if she were standing in a balloon. Moreover, her face was oval and pretty, her hair dark beneath the little cap, and her bright eyes possessed a sly freedom, which triumphed over those of Robin.

"Major Molineux dwells here," said this fair woman.

Now, her voice was the sweetest Robin had heard that night, yet he could not help doubting whether that sweet voice spoke Gospel truth. He looked up and down the mean street, and then surveyed the house before

which they stood. It was a small, dark edifice of two stories, the second of which projected over the lower floor, and the front apartment had the aspect of a shop for petty commodities.

"Now, truly, I am in luck," replied Robin, *cunningly*, " and so indeed is my kinsman, the Major, in having so pretty a housekeeper. But I prithee trouble him to step to the door; *I will deliver him a message from his friends in the country*, and then go back to my lodgings at the inn."

"Nay, the Major has been abed this hour or more," said the lady of the scarlet petticoat; "and it will be to little purpose to disturb him tonight, seeing his evening draught was of the strongest. But he is a kind-hearted man, and it would be as much as my life's worth to let a kinsman of his turn away from the door; you are the good old gentleman's very picture, and I could swear that was his rainy-weather hat. Also he has garments very much resembling those leather small-clothes. But come in, I pray, for I bid you hearty welcome in his name."

So saying, the fair and hospitable dame took our hero by the hand; and the touch was light, and the force was gentleness, and though Robin read in her eyes what he did not hear in her words, yet the slender-waisted woman in the scarlet petticoat proved stronger than the athletic country youth. . . . (Italics mine)

⑦ Daniel G. Hoffman はこの点を正しく理解せずロビンを全くの愚か者とみている。(*Form and Fable in American Fiction*, Oxford Univ. Press, 1961, p. 119.)

⑧ 月光はホーソーンの作品世界では重要な媒体であるが、この場面の初めの部分に次のようにある。「月が、想像力の作用のように、見なれた景物の中に美しい不思議な感じを作り出し、星間の光の中ではありふれた風景にすぎぬものにロマンスめいた雰囲気を与えていた。」(二二六頁)

⑨ ここで「垂直に」という言葉を用いたのは、専ら主人公の意識の中に入っていってもホーソーンの叙述は現代的な「意識の流れ」の描写とは根本的に異るということを云いたいからで、後者が主人公の意識と合体して文字通り横に流れるの

に対し、ホーソーンの場合はあくまで客観性を維持していわば垂直の軸を上下しつつ俯瞰的に主人公の意識を叙してゆくのだ。

⑩ R. H. Fogle, *Hawthorne's Fiction: The Light and the Dark*, revised ed., 1964, pp. 111-13.

⑪ この意味の示唆を何れかの研究書或は論文で見たような気がするのであるが、改めて探してみても見つからないでいることをお断りしておく。

⑫ Neal F. Doubleday によるこの「紳士」のとらえ方は筆者のとは全く違っており、彼はこれをロビンを堕罪に誘うところの、町の住民達の中でも最も“sinister”な人物としている。刺激的な考えであるが、この人物を行列をなしている人物達と同じ範ちゅうに入れるという点で筆者の見解と相容れない。(*Hawthorne's Early Tales, A Critical Study*, Duke Univ. Press, 1972, pp. 236-7.)

⑬ 例えば D. G. Hoffman 前掲書。